

講演「朝鮮医薬と徳川吉宗」（要旨、日韓文化交流基金 NEWS44 号に掲載）

2007 年 9 月 28 日

田代和生氏（慶應義塾大学大学院教授）

徳川吉宗という日本人になじみの深い将軍の時代は、先駆的な経済政策を行うなど、江戸時代のひとつの節目であるとともに、近代につながっているといえます。そしてその仕事は、意外にも朝鮮と非常に深い係わり合いがありました。そのキーワードは、薬です。

吉宗の願い

「薬好き将軍」というのが徳川家に歴代生まれています。代表的なのが徳川家康で、将軍自ら薬を調合して家臣に飲ませたという記録がよく出てきます。吉宗や、その祖父頼宣もまた大変な薬好きです。薬園を作って中国や朝鮮の薬材となる植物を栽培するほか、吉宗は当時の薬学である「本草学」の専門家を民間から実力試験で登用し、優秀な者には御典医を任せています。

そんな将軍吉宗がとても我慢できなかったことは、当時中心的な薬材だった朝鮮人参が非常に高値で売られていることでした。そのころの日本は「人参ブーム」で、朝鮮から大量の人参が輸入され、対馬藩直営の江戸の「人参座」で商われていました。その値段は1斤（600g）で、農家の出稼ぎの1年の収入の10倍以上に相当するほどの高値でした。背景には、庶民にまで人参の多用現象が浸透していたことがありました。日本の医師が怠慢で研究不熱心で、どんな病気でも人参を勧めてしまうのです。このため、娘の身売り話が出たり、人型に近い人参ほど悪気を吸い取ってくれるとあって神棚に上げて大事にしながらスライスして煎じて飲むといったように、人参自体が神格化していました。



倭館が作成した報告絵図。克明に描かれた図から、これが今では絶滅したカンムリツクシガモの雄であることが判明した。

医学先進国朝鮮

近世に、民間人まで突然人参を多用するようになった背景には、朝鮮医学の影響がありました。朝鮮の医学は中国の医学と区別なく日本に入ってきて、「唐薬」といわれていましたが、源をたどると朝鮮から入ってきたものが多いことがわかります。

高麗末期ごろから朝鮮では医学が非常に盛んになっていきます。単に中国の医学を写し取るのではなく、それを消化吸收した上で独自の学問を形成していったのが朝鮮医学です。15 世紀初めの世宗大王の時代に朝鮮医学は全盛期を迎え、制度的にも充実していきます。朝鮮時代を通じて、200 種類以上の独自の医学書が刊行され、16 世紀までには朝鮮医学の基本が完成していたといわれています。

文禄・慶長の役の略奪品の中で、印刷が非常に優れていた朝鮮の書籍は日本でとても尊重されました。やがてその中に多くの医学書があることが判明し、日本の有力者のレベルで朝鮮の進んだ医学が知られるようになります。

江戸時代には朝鮮との貿易を行う対馬藩に対し、有力者からたびたび医学書の要求が出されます。その注文書籍の中に、やがて『東医宝鑑』が現れ出します。『東医宝鑑』は、現在も韓国医学で使用される医学書で、朝鮮医学の最高峰といわれるものです。『東医宝鑑』は、その前の時代の『郷薬集成方』や『医林撮要』の流れを引き、その核心は朝鮮の「郷薬」の代名詞である人参の多用でした。しかし人参は即効性があるかわりに体力のない人にはきつすぎるといわれ、それらの医学書が書かれた時代には必ずしも薬の主流ではありませんでした。『東医宝鑑』を編纂した許浚は国王宣祖の時代の御典医ですが、宣祖が亡くなったとき、人参の多用で国王が亡くなったと反対派から非難され流罪になります。この流罪中に『東医宝鑑』の編纂を進め、17 世紀の初めに完成しました。

『東医宝鑑』は 1718 年に、半ば強制的に対馬から召し上げるかたちで将軍吉宗に献上されます。そこに 1400 種類もの薬材の調合と効能が網羅されているのに吉宗は大変驚きます。ところが、それは漢文と朝鮮の固有語がハングルで書かれていたため、正体がよくわかりませんでした。そこで当時の第一の知識人と思われていた大学頭の林鳳岡に解説を命じたのですが、朝鮮通信使に学識不足を指摘されたこともある鳳岡は全く答えられず、対馬に調査命令を出しても全て失敗に終わってしまいます。

吉宗の命令

そこで吉宗が白羽の矢を立てたのが、奥医師の林良喜という 25 歳の青年でした。林良喜は吉宗の母親の縁続きで、彼女の江戸城入りのときに呼ばれて奥医師になる若き薬学の秀才です。

まず、朝鮮通信使が来日したときに 医事問答を林にやらせ、『東医宝鑑』の薬について尋ねます。しかし、同定行為が行われてないことと、朝鮮の医師が生きた状態の草木を知らなかったため、問答はかみあわず見事に失敗してしまいます。

仕方がないので現地に調査団を派遣することになりました。1721 年に林良喜は 178 種類

に及ぶ項目の朝鮮薬材調査を対馬藩宗家に命じます。その方法は、薬材の現物を入手するか、それができなければ絵図を提出せよ、漢字が同じでも物が同じとは限らず誤解を生むから、文字での問いかけは決してしてはならない、というものです。この調査は吉宗が亡くなった年に終了命令が出るまで、その後 30 年以上続けられます。

その陰で、人参の生きた根をもってこい、という吉宗の極秘命令が出ます。林良喜が対馬藩に命じ、1721 年 10 月末に現物が届きます。この後も吉宗からの命令が続き、苗や種が対馬から送り届けさせられることになります。

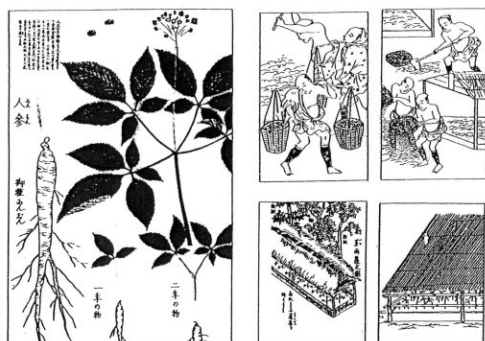
倭館における薬材調査

以上のことから倭館の薬材調査には表と裏の二通りのルートがあったと考えられます。

一つのルートは、朝鮮の国家と外交交渉をして許可をもらった公的ルートです。これは訳官（通訳官）が中心になっているので、私はこれを「訳官ルート」と呼んでいます。朝鮮の調査の主任は差備官（通訳官）の李碩麟で、1721 年 8 月末に任命されて活躍します。李碩麟は植物や動物の現物を朝鮮の各地から入手し、現物を送れないものについては克明な報告絵図を作成し、倭館を通してそれらの資料を日本に送っています。

一方、並行して動いていた裏ルートの主任は金子九右衛門という貿易商人ですが、彼はさまざまにつてから薬材を買い集め、こちらの方から収穫が上がっていきます。その日付と合わせると、江戸城に届いた人参の生きた根 3 本は、この裏ルートで倭館に入ってきたのではないかと思います。薬材調査の報告書は 8 月初めが 1 回目 で、2 回目は 9 月初めの日付ですが、訳官ルートは 8 月末に任命されており、その時点で報告書が書けるはずがありません。ですから、先に届いていたのは裏ルートの報告だったことがわかります。

このように対馬藩は薬材調査を成し遂げ、かつ朝鮮人参の生きた根や種を仕入れてくることになります。もちろんこれは対馬藩にとって不利なことですが、将軍が苗や種を手にしたところで、今までも栽培が成功したことがなく、絶対に日本で国産化できるわけがない、と宗家側が考えていたふしがあります。ところが、吉宗はあきらめませんでした。



お種人参の栽培（田村藍水『人参耕作記』）

調査の成果

この調査は、本草学者の丹羽正伯に引き継がれていくことになります。林良喜は調査を始めてまもなく 27 歳で亡くなってしまい、曲折を経て丹羽正伯が吉宗の命令で引き継ぎます。丹羽正伯は吉宗が民間から試験で採用した人物で、1732 年に吉宗から『庶物類纂』という本の編纂事業と、朝鮮薬材調査が命じられます。『庶物類纂』とは、国内外のあらゆる物を網羅した博物学史上不朽の大著といわれ、1054 巻という大変膨大なものです。この時から薬材調査はさらに徹底したものとなります。丹羽正伯は朝鮮薬材調査の手法を日本の産物調査に応用し、全国から書き上げられてきた「諸国産物帳」を基に、1738 年に『庶物類纂』の続編が完成し、やがて朝鮮薬材調査の成果も全てミックスして 47 年に増補版が完成します。

そして、その背後で「お種人参」の栽培が進みます。1721 年に江戸城に届いた人参の生根は、日光の御薬園で栽培に成功し、後に佐渡でも株を増やします。その種が増えたところで、人参耕作法を各大名家に渡し、栽培させます。そして高地で朝鮮と気候風土の似ている場所で栽培に成功していきます。将軍自らが種を与えて大名家に栽培を奨励したという事で、この人参を「お種人参」といいます。

調査の成果は対馬藩の予想とは全く違う方向にいくことになります。「お種人参」の大成功によって、人参の国産化の道が開かれます。幕末の開国時の日本の三大輸出品は、生糸とお茶と人参でした。本場の中国・朝鮮産に負けない人参の品質によって国際競争に打ち勝ち、輸入代替に成功します。物の輸入には貴重な資産が日本から外に出るわけですが、結果的に吉宗はそれを防いでいきます。進んだ朝鮮の医薬を我が物にしたいがために始まった吉宗の施策は、最後にはそれを日本の宝物にしてしまったことが、薬材調査の中から見てとることができます。

(了)